

団地を「ふるさと」にする方法を考える 「生活空間の履歴」の解読への参加と協働をめぐる

文部科学省 私立大学 戦略的研究基盤形成支援事業
 『集合住宅「団地」の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究』

SEPTEMBER
 2012
 VOL.080



図1. 武蔵野緑町パークタウンとユーコートの人々

団地を故郷にする

「ふるさと」としての団地とは「都市の精神」が育まれるローカルな場所をいう。そこはグローバルに開きつつ、周囲に対して相対的に自立した生活空間である。また自分たちのまちは自分たちで守ろう、育もうという住民の実現能力である「縁」パワーメントを養い、育む場所でもある。さらに地理的・生態的・生活的・文化的・経済的などの団地環境資源の持続可能な自律的活用のものである。

これからの団地再編の技術開発研究にあっては、ハード・デザインとしての技術的合理性、制度的機構、空間の力を研究するだけでなく、ソフト・デザインとしてのコミュニケーション的感受性、エンパワーメント、生活の力の研究に着目すべきであろう。言い変えるならば合理的理性だけでなく、関係の感性の研究が求められよう。

本リーフレットでは、「生活空間の履歴」の解読への参加と協働すなわち「遊歩謀讃」による団地再編の方法について述べる。事例として武蔵野緑町団地における「遊歩謀讃」による建替計画について、ま

た団地を「ふるさと」にしたユーコートの事例、UR荻窪団地の建替事業「記憶をつなぎ、人と自然がめぐりあうまちへ」の事例について紹介する。最後にふるさととしての団地再編とは何かを述べたい。

遊歩謀讃とは

本リーフレットにおけるもっとも重要なキーワードとして、「遊歩謀讃」がある。これは、まちの探検と、その魅力や問題点の発見、見つけたものに対する意味づけ、そして、どのようにして人間と空間の関係の未来を構築していくか、また新しい提案をしていくかを考える過程をいう(図2)。これからの団地再編は、住民の「遊歩謀讃」によってなされるものである。

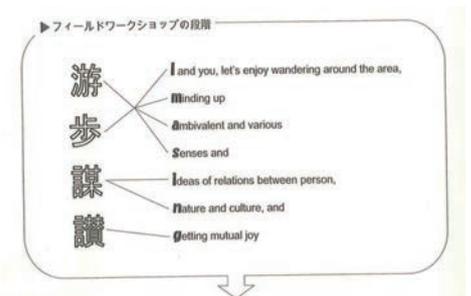


図2. 遊歩謀讃

1. 「游歩謀讀」による建替事業

1.1 武蔵野緑町団地の建替

武蔵野緑町団地は昭和32年に造られた団地で、美しい桜並木が取り巻く団地である。ここでは住棟間にあるコモンスペースが出会いの空間となり、空間の力によってコミュニケーションが結実していた。

築30年を経て高層住宅への建替計画が作られ、平成3年から事業が始まった。自治会では住民の不安を探るアンケートを実施し、その結果、建替には住民の9割が反対しており、家賃高騰、間取りの悪化、環境悪化を懸念する意見が多いことがわかった。一方で、ここに住み続けたいという意向も強いことがわかった。

自治会は反対運動を始めたが、URは一方的に計画を進めていった。自治会では、建替に反対するだけでなく、住民からの創造的提案が必要であるとする専門家の意見に基づき、生活の意欲を空間の形に反映させるべく、団地建替にかかる勉強会を行っていった。

この勉強会では住民の中から重要なキーワードが提起された。「もうアカンと想うのも想像力！ まだまだ『いける』と思うのも想像力！ どちらの想像力にけるのか？」

1人の主婦による呼びかけから、団地再編への方向を住民自らが決める道りが始まったのである(図3)。



図3. 勉強会の様子

1.2 游歩謀讀へ

心の眼を養い団地再編の方向を発見し分かち合うために「游歩」から始めるべく、団地の宝物探しから始められた。住民は専門家やコーディネータとともに団地内の動植物について調査を行い(図4)、それらの結

果は地図にまとめられた(図5)。

また野草をてんぷらにして食べる会などが開催され、住民は団地の魅力や思いについて自らの認識を深めていった。

この「游歩」の意義は、「游歩」的



図4. 游歩の様子



図5. 游歩のできた地図

フィールドワークショップは荒削りではあるが、価値や意味を団地の環境文脈の中に発見し、「生活の履歴」の解釈につなげることにより、生活と空間の再編のための蝶番のようなコンセプトを相互に分ちあっているところにある。

住民は次の「謀」の段階、よき未来を計らう、たくらむという次の段階に向かっていった。

「謀」の段階では、住民は提案書を描いていった。ただし最初から絵を描いたのではなく、なぜこの団地が好きなのか、思いを演劇やつぶやき、文集や短歌として表現していった。

そして住民らによって環境部会や間取り部会がつくられ、間取り計画を生活者の立場から提案するなど、具体的な提案が行われた(図6)。

一方、自治会とURの交渉を通して、URの態度も住民とともに計画づくりを行うという方向へと変わっていった。

住民の計画案では、今までの団地の何を大事にしたいかを重視し、困



図6. 住民らによる提案

みの空間や、フットパスの間に見え隠れする生き物、小学校通学東西の軸線、桜並木によるリング状の骨格などの環境設計が、建物の配置とともに提案されていった。

最終的に建替え計画は、これらの住民提案に寄りそう形で作られ、創造的提案に至ったのである。

この「謀」の意義は、「謀」とは対話・表現・提案をいい、フィールドワークショップによる柔らかい発想が、住民同士や住民、専門家、事業者の間に相互触発関係を育み、人間、自然、人工、文化を横断する創造的提案を生成させるところにある。

1.3 ふるさととしての団地の「趣き」を作る

ふるさととしての団地の趣きをつくるには、まず開きつつ閉じつつの生活空間の再編にある。つぎに、それは住民の「縁」パワーメント(住民の実現能力)を育成することによって実現する。また団地環境資源の持続可能な自律的活用が必要であり、団地の趣きは共有可能にしえた喜びにひたりながら、ステークホルダーが相互に承認し、讃えあう関係性が生成していくものである。

1.4 「游歩謀讀」的アプローチ

団地再編を「游歩謀讀」的アプローチで進める際のキーワードとして以下が挙げられる。

- ①越境:住民、専門家、行政が、他者を鏡にして新しい自己を映し出す意識の発芽を促す可能性をひらく。
- ②遊び/面白い:合理性や機能の中に閉じこもらずに自由な遊び心と面白いことへの自発的感性を大切にする。遊び的要素のある進め方は「偶発」と「即興」にあふれ、未知的なもの

に飛びこむ勇気をもって進行する。

③空間配置・履歴・表現:空間における複数の身体レイアウトに規定された出来事が、ヒト、モノ、コトの間のつながりの意味を察知させる。空間体験による感動表現と相互敬愛の流れは、未来展望のある活動的な思考と計画を生む。

④おもむき/センス:「おもむき」は、人間と環境の間の応答、循環関係を促すヒトの志を表していく。「おもむく」「おもむき」は、一人ひとりの主観とまわりの客観の間に有機的な交流を感じるセンス (SENCE)、意識の方向感である。

⑤詩的ロジカル:「游歩謀讃」による団地再生は、アートの感動を伴う理知の獲得の場である。人は一つの全体、アンサンブル、星座のような人間・環境の関係性のなかで、自己がひらかれ、団地に潜在する価値への気づきが分かちあわれていく。

⑥実践知:技術、制度と、人格尊重が両立しない場合、団地の本来的価値を重視する人格の尊重を優先させることを実践的知恵という。「何を目指すか」「何が大切なことか」といった「実践」に内在する目的論を昇華させ、多様なステークホルダー達がお互いに友愛関係を紡ぐ過程をたどるなら、団地に生きる真の「しあわせ」を分かちあうことになる。

1.5 しなやかな文化、したたかな団地再生へ

団地再生を文化ととらえることが肝要である。文化とは世代を越えて持続し、各個人のなかに再生産され、社会的複雑性を生成し再生産するものである。

「游歩謀讃」を通して創造的団地再編を構築することは、次世代に向けて「都市の精神」を反映した「ふるさと」を再創造することではないだろうか。「都市の精神」を映した「ふるさと」への再生がこれからのしなやかな団地再編であろう (図 7)。

2. ユーコートの実例

ユーコートは 1985 年竣工の 48



図 7. 完成した新しい緑町パークタウン

世帯によるコーポラティブ団地である (図 8)。

築 20 年目に、ここで成長した若者に集ってもらい、団地に対してどう思うかワークショップとインタビューを行った。ある高校 3 年生はユーコートが好きであるという。それは中庭で友達と遊んだことや、近所のおじさんが声掛けしてくれたこと、池の掃除のときにコイをつかんだ体験など、数多くの楽しい記憶があるからだという。

他の者も祭りやコンサート、年長者による紙芝居 (図 9) や草履づくりなどの記憶が楽しいといい、団地の空間環境や住民から生きる力をもらったという。また成長しユーコー



図 8. ユーコート (中庭より望む)



図 9. 紙芝居の様子

トを出て行った子供が近くに帰ってくる状況もみられ、団地がふるさとになっていった。

Uコートでは、程よいプライバシーを保ちながら、ゆるやかに人と人がつながる、つながりあうハード・ソフトの環境デザインができていた。

3. UR 荻窪団地の建替

UR 荻窪団地は昭和 32 年に建設された団地である。2002 年に建替事業が始まったが、同時に住民は「游歩」の旅に出た (図 10)。そして大事なものとして、善福寺川からの風、桜並木、富士山の眺望などが挙げられた。住民にとって、団地内の豊かな緑、個性的景観など何を大事にしたいのかが認識された。

また団地の命はどのように継続するかを考え、江戸時代のあぜ道が団地の骨格となっていることや、富士山が見える眺望が大変重要なことで



図 10. 游歩の旅

あることが認識された。

こうした結果は荻窪団地の歳時記として記録され、緑の空間を気持ちのいい呼吸ができる宝として生かそう、豊かな樹木の下で環境を楽しもう、といった団地の気持ちの良さが実感されていった。そして無意識だった団地の良いところや環境の魅力が客観的に整理されていった。

建替計画づくりは住民によるワークショップで行なわれた。団地のかくされた魅力をどうやって継承するかが話し合われた (図 11)。

専門家は住民のつぶやきを解釈し、どのように住民に安心を届けるのかに心を砕き、気持ちづくりから形づくりへのプロセスを進めていった (図 12)。

住民による計画づくりに対して、UR は耳を傾け続けた。UR 賃貸住宅の住民は、団地をわが故郷として考え計画に参加し、本音を出し合って計画づくりを進めていった。

そしてシャレード荻窪というおしゃれな名前となって、UR 荻窪団地



図 11. ワークショップの様子



図 12. 専門家の参加

は建替えられた。

住棟の足元にピロティが配され、フットパスとなっている。階段室は開放感のある作りにされたほか、テラスには広がり感がつくられ、内と外の連続性が確保され、集会所は内部空間と外部空間をつなぐ場として、また団地の顔としてつくられた(図 13)。

このように UR 荻窪団地では、住民の「遊歩謀讃」によって、団地の宝物を活かした刷新がなされた。

4. ふるさととしての団地再編とは

4.1 生活の力と空間の力

ふるさととしての団地再編は、開きつつ閉じつつの親密な生活空間形



図 13. ピロティのある住棟と集会所

成の履歴によって実現される。ひとりひとりが住まうことへの志向性とまわりのつながりの行為性が相互にからむ「生活の力」と、人の行為を誘発し促す「空間の力」の「時をつなぐ」相互浸透関係がやわらかく親密な生活空間を生成する。

4.2 プロセスデザイン

ふるさととしての団地再編は、「縁」パワーメント(住民の実現能力)を育むプロセスデザインである。住民の力をどのように育てていくのが重要で、「縁」パワーメントによって団地再編プロセスができてくる。

4.3 団地再編における「縁」パワーメントとは? (図 14)

- ①「縁パワーメント」の対象者は、ニーズをもつ受身の存在ではない、ひとりひとりよりよく「和(図 14)」をもって生きる(ウェルビーイング)権利をもつ市民として位置づける。
- ②ひとりひとりの欠点を直すよりも、「吾(ひとりひとり)(図 14)」の得意の技や術をもつコンピテンス(有能さ)を重視する。
- ③「縁パワーメント」とは、個人、地縁と志縁の組織、コミュニティが自分自身の生活全体を見「回(図

14)」し続けることができる過程であり、メカニズムのことをいう。

④これまでの行政や専門家主導のやり方ではなく、地域住民主導の進め方であり、住民が団地再編の主人公であり、行政も専門家もコミュニティ・メンバーとともに「話(図 14)」しあい団地再編を目指していく協働者である。

⑤団地の諸施設、空家、自然などの「環(図 14)」境(あるもの)を活用し、潜在しているまちのリソース・地域資源を顕在化させる。

⑥コミュニティ活動には対立や葛藤がつきものである。対立を対話に変え、真に包括的で多様性の「輪(図 14)」に導くよい兆候としてとらえることが、個人・組織・コミュニティの「縁パワーメント」になる。

4.4 団地環境資源の自律的な持続可能な活用

かつての空間・生活・文化的資源の再創造により、まちに開かれた文化創造活動が持続していく。住民たちが願っていることは「天国はいらない、ふるさがほしい(詩人セルゲイ・ニールセンの言葉)」に代表されよう。

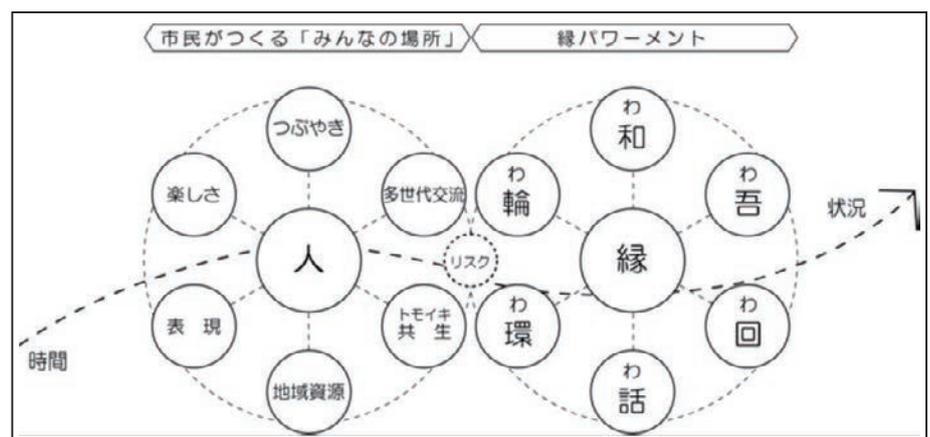


図 14. 団地再編における「縁」パワーメント

『団地を「ふるさと」にする方法を考える
「生活空間の履歴」の解釈への参加と協働をめぐる』

文責：延藤 安弘(愛知産業大学 教授)
作成協力：保持 尚志(関西大学大学院 博士後期課程)

(講演：2012年7月20日)

本リーフレットは、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「集合住宅「団地」の再編(再生・更新)手法に関する技術開発研究(平成23年度~平成27年度)」によって作成された。

発行：2012年9月

関西大学
先端科学技術推進機構 地域再生センター
〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号
先端科学技術推進機 4F 団地再編プロジェクト室
Tel : 06-6368-1111 (内線 : 6720)
URL : <http://ksdp.jimbo.com>